

**Björk**

—ビヨルク(白樺)—



Copyright: Photo by Johanna Lageblad

スウェーデン北部ラップランドフィエル(Lapplandfjäll)にかかる虹。スウェーデンで夏に人気のアクティビティの一つ、それは北部スウェーデンにある“クングスレーデン(Kungsleden「王様の散歩道」)”をハイキングすること。クングスレーデンはヴェステルボッテン(Västerbotten)地方のヘムワーラン(Hemavan)からノルボッテン(Norrbotten)地方のアビスコ(Abisko)まで、約400kmの距離を5つのパートに分けて通る有名なハイキングトレールコースです。

(写真提供: Johanna Lageblad)

対談 ノルボッテン県知事 ロッタ・フィンストルプ & SCF評議員 東海大学名誉教授 川崎 一彦	.....	2
広報誌「ビヨルク」これまでのあゆみ	.....	7
寄稿「マルメからの便り」	..... URL(ユニバーサルリサーチラボ)代表 浦野 真理	10
連載寄稿「スウェーデンの現在」⑯	..... ソフィア・マルム	14

一般財団法人スウェーデン交流センター（理事長 内野 貢）

〒061-3777 北海道石狩郡当別町スウェーデンヒルズ2329番地25

TEL 0133-26-2360 FAX 0133-26-2992

http://www.swedishcenter.or.jp/ e-mail: info@swedishcenter.or.jp

ノルボッテン県知事

# ロッタ・フィンストルプ

Lotta Finstorp, Landshövding i Norrbotten



SCF評議員・東海大学名誉教授

## 川崎一彦



Copyrights: Gösta Reiland/imagebank.sweden.se

2016年にスウェーデンの国会議員団が来日した際、北海道にも訪問されて、SCFにもいらっしゃいました。その訪問団のひとりであったロッタ・フィンストルプ Lotta Finstorp さんが、今年2月にノルボッテン (Norrbotten) の県知事に就任されました。ノルボッテンをはじめ北部スウェーデンでは、今サステナビリティ（持続可能性）をキーワードに目覚ましい発展を遂げています。

その経済発展の背景とノルボッテンの今後について、SCF評議員を務めてくださっている川崎一彦先生とロッタ・フィンストルプ知事がオンラインで対談されました。

川崎（以下K）：本日はよろしくお願ひいたします。まずはノルボッテン県知事ご就任おめでとうございます。5年前、2016年に国会議員の訪問団の一員として日本にいらっしゃった際のことは覚えていらっしゃいますか？

ロッタ（以下L）：こちらこそ、本日はよろしくお願ひいたします。2016年のことはよく覚えています。フェイスブックにも当時の様子を投稿させてもらいました。非常に有意義な訪問であったことを覚えています。あの時は色々とありがとうございました。



2016年の国会議員団のSCF訪問時のように

K：あの時日本の北の都市札幌の隣にある当別という町を訪れたことを覚えていらっしゃいますか？

L：ええ。ダーラナ (Dalarna) 県のレクサンド (Leksand)

市と姉妹都市提携を結んでいる町ですね。

K：そうです。その当別町にあるスウェーデン交流センターの職員で、その当時にはいなかったのですが、今日この対談に同席してもらっている職員が作成している広報誌「ビヨルク」に、今回の対談を記事として紹介してもらおうと思っています。

SCF職員：（画面で冊子を見せながら）こんな冊子なのですが…お見えになりますか？

L：ええ、よく見えていますよ。「ビヨルク (Björk = “シラカバ”の意)」というタイトルにされていること、とても素晴らしいですね。スウェーデンにはシラカバが沢山ありますからね。スウェーデン人にとってとてもなじみ深いものです。

K：その通りですね。北海道を訪れたスウェーデン人も、シラカバが多く生えていることから、さながら家に戻ってきたようだと感じるようですね。その交流センターでは今ヴェステルボッテン県を紹介する展示を行っているそうですが…いくつか写真を見せてもらえますか？

SCF職員：もちろんです（画像共有しながら）、お見えになっていますか？

L：ああ、ウメオー (Umeå) の紹介をされているのですね、シラカバの街ウメオー。素晴らしい取り組みです。

K：今はヴェステルボッテン (Västerbotten) の展示をされているのですが、ノルボッテンの紹介をしてもらうとい

うことも良いですね。

L: それは良いですね。写真の紹介だけでなく、デジタル素材を使って紹介することにも取り組んでいますので、もしこちらの地域を紹介してもらえるのでしたら、そういうものを使ってここノルボッテンを紹介してもらえたなら良いですね。

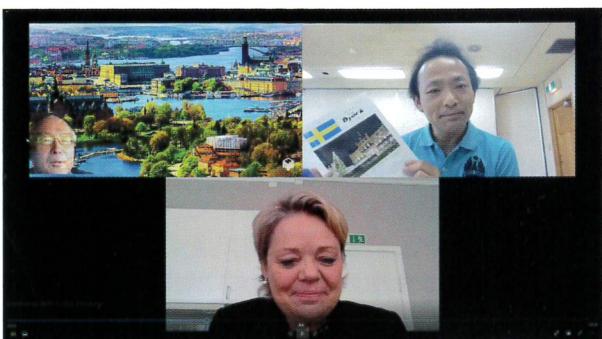
K: 良いですね。聞くところによると、先日交流センターではストックホルム（Stockholm）の旧市街ガムラスタン（Gamla stan）を紹介するバーチャルツアーをされたとか。参加者は定員一杯だったそうですよ。

L: それはすごいですね！

K: ノルボッテンについても同様なバーチャルツアーを行うことは、日本人にとってとても興味深い体験になるのではないでしょうか？

L: その通りですね。ノルボッテンにも多くの観光資源がありますし、交流センターの広報誌のタイトルのように白樺の木もたくさん生えていますから。当別町を訪問した時に交流センターにも伺いましたが、交流センターのあるスウェーデンヒルズの赤と白で彩った家の街並みはノルボッテンにも多く見られます。ここと共通するものが数多くなって日本の方にも親しんでもらえることでしょう。

K: 素晴らしい！交流センターさんはぜひ一度企画されてみてください。さて、今日は知事には就任間もない中で貴重な時間をいただいたのですが、知事として就任されて、ノルボッテンの現状や今後のことなど、いくつかお話を伺いたいと思っています。



Zoomでおこなわれたオンライン対談時の一コマ

まずは知事のこれまでの政治活動についてお聞きしたいのですが、知事のお生まれは…。

L: 私の生まれは南部スモーランド（Småland）地方のヴィンメルビュー（Vimmerby）という街です。「長くつ下のピッビ」で知られるアストリッド・リンドグレーンの生まれた街として知られていますね。

K: そうだったんですね、知事の口調には Skånska …南部の方の方言を感じられなかったので、他の地域と思っておりました。次に知事の政治キャリアのことをお聞きしたいのですが、政治に携わるようになってどれほどになりますか？

L: 私が政治に関わるようになったのは高校生時代のことです。最初はそれほど精力的に活動していたわけではないのですが、その後大学で社会福祉学を学んで、ソーシャルワーカーとして子どもたち…特に病気を抱える子どもたちのための仕事をしました。90 年代の前半に政治の世

界に入り、政治から多くの社会問題に取り組むようになりました。

ほどなくしてストックホルム南部、セーデルマンランド（Södermanland）県の故郷にある小さな町フレーン（Flen）の市議会の議長を務めた後、セーデルマンランド県の議長に就任して国との橋渡しに関わり、2010 年に国会議員としてスウェーデンの国会に入りました。国会では多くの諸課題について多くの委員会や組織に関わり、2016 年に海外の社会保険制度や健康保険制度について調査する国会議員訪問団の一員として日本に行くことにもつながりました。

国会では文化・スポーツの政策などに関わる Kulturutskottet（文教委員会）の副委員長として、また穏健党 Moderaterna のスポーツマンとして活動しました。国会議員の職に携わっていたのが今年の 2 月までで、その後ノルボッテン県の知事に就任しました。

K: なるほど。政治に携わってこられたということで、日本の現状を踏まえてお訊きしたいのですが、日本では今「若者の政治離れ」が問題となっています。例えば日本では若者の投票率が 50 パーセントを下回ることが珍しくありませんが、このことを若者たちは深刻な問題だと捉えていません。スウェーデンの現状と比較して、どのような対策を考えられるでしょうか？知事の場合は高校生の頃に政治に関わるようになったとのことでしたが。

L: そうですね、私の場合は両親の影響もあったでしょうか。当時は夕食の時など、家族でスウェーデンや世界で起こっていることについて話をすることが多かったと覚えています。私の姉妹も興味を持っていましたね。

私たちの国、私たちの社会では、両親の持つ影響というものはとても大きいものがあります。特定の政党にのみ投票するということが許容されるべきではありませんし、すべての人に選択し、決定する権利が与えられているということは理解しておくべきことです。それぞれの地域の活動、関わり合いというのも大きい影響をもつものではあると思います。ご指摘のように、日本の若者が政治に対して興味を持っていないということは、日本の民主主義が別のものに取って代わられるリスクがあることを示しているように感じます。過去に独裁者が政治を掌握し、その国を好き勝手に動かそうとしたのは、国民それぞれが社会をどうしていきたいかといったことに興味を持たず、また影響を与えたくないと考えていた時に多く見られたことです。

スウェーデンの若者の政治参加で注目すべきは大学での彼らの活動です。例えば「なぜ投票することが大切なのか」を主張することは義務であり、権利でもあるのです。スウェーデンでは若者たちの中で投票に行こうとする活動をする者たちの割合が非常に大きく、ある大学ではその投票率が 80% 余りにもなったところもあるのです。

民主主義を守り、より良いものとするために私たちは努力すべきですが、日本の若者の現状には憂慮すべきでしょう。学校での活動にはもっと注目する必要があるかと思っています。なぜ民主主義は大切で、投票するということはどれだけ価値があることなのかを若者が知るた

めに学校は重要です。

K: 仰る通りです。このテーマは非常に重要なことで、今後も日本の若者を巻き込みつつ討議していきたいものですね。

民主主義の在り方に限らず、日本や日本の若者たちがスウェーデンから学べる事はたくさんあると思っています。知事のノルボッテンでの在職期間は5年だったかと思います。その間に多くのことでノルボッテンと北海道とを結んでいけたらと思っています。北海道は「日本のノルボッテン」ですから。

経済、産業の分野でもスウェーデンから学べることは多いと思います。私が初めてスウェーデンに赴いたのは1970～80年代のことでした。その頃は AMS…Alla Måste Söderut（労働市場庁：“皆南へ行くべき”）、つまりは当時のスウェーデンは就労機会や産業が南部に集中していたことを揶揄する表現がありました。

しかし今はその逆で、「皆で北に行くべき」と、北部スウェーデンでの産業が活発になっていると聞き及んでいます。巨大産業やバッテリー産業がイエリヴァーレ(Gällivare) やボーデン(Boden) に進出しようとしていることなど…今ノルボッテンやノルランド(Norrland) では何が起こっているのでしょうか？

L: 当時のスウェーデン北部での南部を目指す動きや、現在ここで起こっていることは確かに仰る通りですね。それはいわゆる「Green Evolution」と呼ばれるものが一因として挙げられると思います。

北部スウェーデンの現況は、今や世界で注目されるものとなっています。交流センターで紹介されているヴェステルボッテンでは、今スウェーデンのバッテリー企業ノースボルト(Northvolt) がシェレフテオ市(Skellefteå) に巨大なバッテリー工場を建設中です。



Copyrights: Photo from Northvolt AB

ノースボルト社がシェレフテオに建設しているバッテリー工場

その背景にはガソリンなどの化石燃料を動力源としない電気自動車の製造に多くのバッテリーが必要となることが挙げられます。電気自動車が今後の自動車産業においてメインストリームとなることは多くのメディアで報じられていますが、そのバッテリーを大量に生産するためのギガファクトリーを建設する理想的な場所として選ばれたのがシェレフテオです。そして電気自動車製造に欠かせない鋼材を製造することに関しても、世界で初めて化石燃料に頼らない、水素によるゼロカーボンでの製鉄をおこなうH2グリーンスチール社(H2 Green Steel) がノルボッテンの都市ボーデンに工場を建設する計画を進めています。

H2グリーンスチールの取り組みは非常に大きなもので、これまで世界で二酸化炭素を排出せずに製鉄を行う工場はありませんでした。この取り組みを行うためには多くの技術者が必要となり、非常に優秀な技術者たちがボーデンに集まってきた。それに伴う人口増加をねらって、今や25,000件もの新規求人を行っています。

最初にあなたが指摘したとおり、かつてスウェーデン北部では過疎化が進み、人々は南の方へ移っていました。女性は質の高い教育の機会を得るために南部に移りましたが、男性は鉱山での仕事の機会もあり北部に留まる者も多かったです。しかし教育を受け、高収入になった女性たちは南部で結婚相手を見つけ、ノルボッテンに戻ることを選ばなかったため、人口は減少の一途を辿ることになりました。この状況を改善するため、北部スウェーデンは大きな挑戦をしたのです。

H2グリーンスチールは大きな工場を建設し、また鉄鋼大手のSSAB社とルレオー(Luleå) に本社を置く鉄鉱会社LKAB、そしてストックホルムに本社を置く電力会社バッテンファール社(Vattenfall) の3社が共同でゼロカーボンでの製鉄を行うスタートアップ企業「HYBRIT」を起業したのです。



フィンストルプ知事が HYBRIT 社のルレオー工場を訪問した際に。

化石燃料に頼らない、新しい形での鉄鋼生産で、新しい可能性も見えてきました。水素を利用しての製鉄、製鋼に切り替える挑戦も現在推し進めています。こうした産業面での活性化も含め、これまで多くの人が抱いていたイメージとはまた別の、新しいノルボッテンを見せていただきたい、そう思っています。

K: なるほど。多くの企業が新しい工場を建設するなどの動きを見せているとのことですが、これらの企業はもう既に地域経済に大きな影響を与えているのですか？

L: そうですね、ノースボルトとH2グリーンスチール両社の資本はもとより、起業家であり投資家のクリスティーナ・ステンベック(Cristina Stenbeck) 氏や音楽配信サービスで知られるspotify( Spotify) 社のダニエル・エーク(Daniel Ek) 氏など大小多くの出資者が名を連ねています。前例のない事業ではあるものの、成長の見込めるベンチャーキャピタルと見込んでのことでしょう。

私たちはノルボッテン県として事業の許認可を与え、その手続きを進めることが仕事ですが、当初からしっかりとした基盤があり、認可までにさほどの時間を要することの無かったノースボルトと同様、H2グリーンスチールにも迅速な対応をしています。

K: 素晴らしい取り組みですね。知事がいらっしゃる5年間のノルボッテンは非常に興味深く、将来に多くの成果

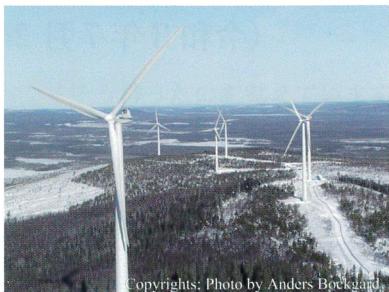
をもたらすものとなりそうです。

それでは最後に、10年後…2030年のノルボッテンがどんな地域になっているか、どのようなイメージをお持ちでしょうか？

L: とても良い質問ですね。スウェーデンの県庁、Länsstyrelsenは国や政府の出先機関として、行政的・法律的な決定…例えば環境目標のようなものもそれに当てはまりますが…それらを実行していくものです。

ノルボッテンは複雑で、土地の問題などでは国益など、様々な点を考慮しなえればなりません。それゆえにそういった事項の決定には時間をかかります。ノルボッテンではトナカイの放牧がおこなわれていますが、そのような伝統的な産業と新たな産業との兼ね合いも大切になっています。

例えば今ノルボッテンには巨大な風力発電施設が多くあり、それらの風力発電機をより多く、大きいものを増やしていきたいと考えている動きがあります。しかしながら県としてはその事業に対して安易に了解を出すわけにはいきません。



Copyrights: Photo by Anders Bockgard

ノルボッテンに設置されている風力発電の風車

確かに現状で800基ほどの風力発電の風車があったと思います。さらに風力発電機を増やすとなると、伝統的に行われているトナカイの放牧や、放牧地を生活の糧としている先住民の方々の権利を侵害することになり、それを安易に容認するわけにはいかないのです。国連が提唱している、持続可能な開発(SDGs)のための2030アジェンダを達成する責任が私たちにはあるわけです。もちろん容易に達成できるものではありません、しかし大規模な投資で利益を得ることができず、トナカイの放牧地を放棄しなければならない人たちは、その後どうするべきか。社会面での持続可能性、環境面での持続可能性、そして経済面での持続可能性。この3つがすべて重要で、ノルボッテンに住む25万人の人たちに関わる問題なのです。いえ、今ここに住む人だけでなく、いずれここに移り住む人達のことも考えていく必要がありますね。ノルボッテンでは、2030年にはおよそ10万人もの人口流入があると見込んでいます。今ノルボッテン全体で人口は25万人ですが、たった10年でその半分近い10万人が入ってくるということは信じがたいことかも知れません。今まさにそうなるような取り組みをしておりましますし、外から来る違った価値観を持つ人たちにとっても、ノルボッテンとは住みやすい良いところだと思ってもらえるようにしていかなければなりません。例えば、その人たちが住むための住居はその最たる例で、ノルボッテンには人口3,000人ほどの自治体がいくつもありますが、総じて

平均年齢が高く、その多くは施設などに移っている人が多いのが現状です。人口の少ない地域に空き家が数多く存在しているので、その空き家の所有者たちに家を売却する意思があるかどうかを確認してもらっています。新しく家を建てるにしても、過疎地域で住む人がいないとなると、銀行としてもその資金を出すわけにはいかないですからね。住む人がいなくなった空き家を上手に利用していきたいのです。

K: それは面白い取り組みですね。過疎地域の問題は日本でも大きな課題となっていますね。地方では空き家や廃村が多くなり、2008年から日本の人口は減少し続けています。空き家や廃村には様々な問題が出てきますが、ノルボッテンでも大きな課題であるわけですね。

人口の増加や過疎問題とは別に、ノルボッテンでは産業ツーリズムの取り組みを進めていらっしゃいましたね。確か80年代～90年代にかけて、ノルボッテンやノルランドでは文化、観光や産業において幅広く交流活動を行っていたと思います。ユッカスヤルヴィ(Jukkasjärvi)にあるアイスホテルなどがありましたら、行かれたことはありますか？

L: いえ、残念ながら…でも行ってみたいところですね。

K: そのアイスホテルの創業者…イングヴェイ・ベルクヴィスト(Yngve Bergqvist)氏でしたね、私がストックホルムのジェトロで働いていた頃ですが、北海道で行われている雪まつりのアイデアを聞き、実際に旅行してその着想を得てアイスホテルを始められたのです。

L: それは素晴らしい！

K: そうですね、素晴らしい取り組みです。ユッカスヤルヴィのものは今や北海道よりも有名なものになりましたが、日本の氷の彫刻家を招聘してアートのワークショップを行うなど、積極的な交流活動がおこなわれていました。そしてウメオーデに行われている“Nolia”見本市では、北海道の文化や物産の展示などもおこなわれました。このように北海道とノルボッテン、ノルランドは文化や経済での交流が活発におこなわれて共通の課題や挑戦に取り組んだ歴史があります。

コロナ禍では直接の交流が難しい中ではありますが、交流センターが行っている紹介展示や、ノルボッテンにスポットを当てたデジタルツアーなど、ノルボッテンや北海道の共通の関心を引き出すための取り組みを進めていきたいものです。

L: 全くその通りですね。私としても民間レベルでの多くの取り組みも考えて行きたいところです。雪やスキー、トナカイ…日本にはいるのでしょうか？北海道と共に通するところは数多くあると感じています。

K: そうですね。それ以外にもアイヌのことを忘れてはいけないです。アイヌはスウェーデンのサーミの方々と同じような、北海道の先住民族の方々です。サーミの方々はスウェーデン、ノルウェー、フィンランド北方の広大なエリアを生活圏としていらっしゃって、その数はおよそ6万人にも及ぶとか。

L: ええ、その通りです。彼らの生活圏やその文化の継承は課題の一つで、取り組んでいかなければならないこと

の一つでもあります。もっとサーミのことを知ってもらうことも大切ですね。そのためにスウェーデン交流センターが取り組んでいらっしゃる活動で一緒にできることもあるかと思います。ノルボッテンにはピーテオー(Piteå)のダンスカンパニーなど、素晴らしい団体が数多くありますので、そういった所に文化発信の可能性を見出せと思っています。もちろんコロナ禍が収束した暁には、実際に会って一緒に活動できることが一番ですね。

K: 旅行などの観光産業はどうでしょう？観光業は知事のLänsstyrelsenの活動の範囲外でしたか？

L: そうです。文化のことも含めこれは各地域の事柄ですので、Länsstyrelsenとして担当する分野は政治や法律面で、文化やビジネス分野は直接は関わりが薄いところではあります。

ただ、国益と言いますか、国としての財産や国の損失に関わるものであると話は変わります。例えば国立公園、ラボニアという地域があることはご存知でしょうか？複合遺産として世界遺産に登録された地域ですが、サーミの生活文化が残る地域であり、同時に自然保護区として保護された地域もあります。そこで考古学者が発掘を行う、そういった場合には私たちが関わることになりますね。地域の団体の活動を支援するということも私たちの役割ではあります。

K: なるほど。自然というキーワードもノルボッテンと北海道とを結びつける重要な要素の一つであり、共通の課題や挑戦、解決策を見出せるのではないかと思いますね。ぜひともノルボッテンと北海道の間で議論を続けていきたいですね。

## 一般財団法人 スウェーデン交流センター 新役員

(令和3年7月24日現在)

### 顧問

ペールエリック・ヘーグベリ	駐日スウェーデン大使
鈴木 直道	北海道知事
秋元 克広	札幌市長
宮司 正毅	当別町長

### 理事

内野 貢	株式会社トーモク 専務取締役
南出 耕一	一般財団法人スウェーデン交流センター 専務理事
竹花 賢一	公益財団法人北海道国際交流・協力総合センター 副会長・専務理事
高野 瑞洋	公益財団法人北海道スポーツ協会 専務理事兼館長
浅香 正博	北海道医療大学 学長
杉本 拓	北海道スウェーデン協会 顧問

### 評議員

堀 達也	元北海道知事
樋口 達夫	大塚ホールディングス株式会社代表取締役社長兼CEO
居林 次雄	弁護士
川崎 一彦	東海大学名誉教授
安田 光春	株式会社北洋銀行 取締役頭取
齋藤 英男	株式会社トーモク 代表取締役会長
山田 明	当別・レクサンド都市交流協会 会長

### 監事

阿部 勝義	株式会社北洋銀行 取締役
-------	--------------

また、2021年6月を以て退任した杉野前専務理事の後任として、事務局長を務めております南出耕一が新しく専務理事として就任いたしました。

6月21日に当財団の理事会で専務理事に選任されました南出耕一と申します。スウェーデン交流センターでは、現在、新型コロナの影響で人々を集客するイベントは開催していませんが、センターホール1階で「スウェーデンの学校」展、2階では「スウェーデンのアーキペラゴ（群島）」展を開催しています。また、ガラス工芸工房と木材工芸工房では制作された作品の展示を行っています。工房で制作したガラス作品やスウェーデンの民芸品（ダーラヘスト）、雑貨の展示・販売も行っています。コロナの感染対策も実施していますので、少人数でお越しいただければ幸いです。



# Björk これまでのあゆみ ③

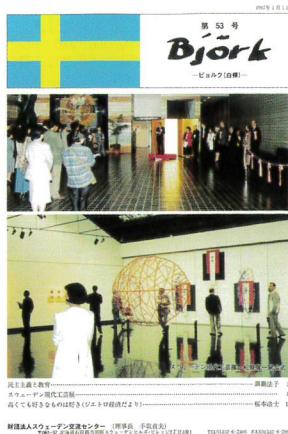
この広報誌「ビヨルク」は、これまで多くの方のご協力のもとに作られ、SCF の活動を紹介するだけでなく、スウェーデンの文化や経済を紹介してまいりました。

前回第 150 号発行に際し、150 号から数回に分けて第 1 号からこれまでのビヨルクの表紙をご紹介したいと思います。SCF を設立時からご存知の方も、新たにこの広報誌をご覧になった方も、当時の様子に想いを馳せていただけたらと思います。第 3 回目の今回は、第 53 号から第 80 号までをご紹介します。



## 第 53 号

1997 年 1 月 1 日発行



## 第 54 号

1997 年 4 月 1 日発行



## 第 55 号

1997 年 7 月 20 日発行



## 第 56 号

1997 年 10 月 1 日発行



## 第 57 号

1998 年 1 月 1 日発行



## 第 58 号

1998 年 4 月 1 日発行



## 第 59 号

1998 年 7 月 20 日発行



## 第 60 号

1998 年 10 月 1 日発行



この頃には、スウェーデンに留学を考えている方や、スウェーデン語に興味を持ち、勉強したいと考えている方に向けた「スウェーデン語試験」が年に数回、交流センターと当時東京都千代田区丸の内にあった東京事務所で開催されていました。

# 第61号

1999年1月1日発行

# 第62号

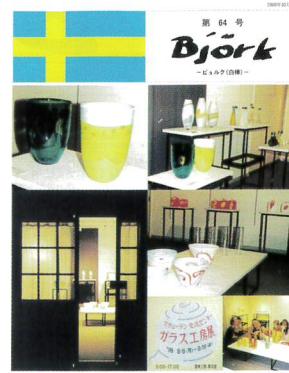
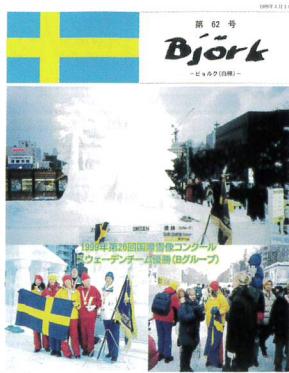
1999年4月1日発行

# 第63号

1999年7月10日発行

# 第64号

1999年10月1日発行



# 第65号

2000年1月1日発行

# 第66号

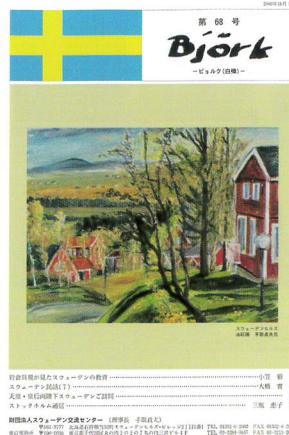
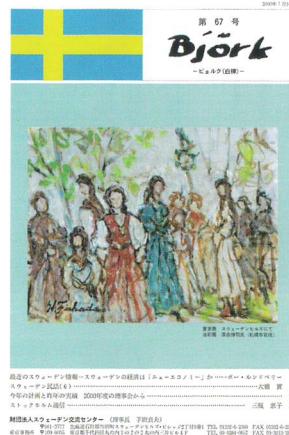
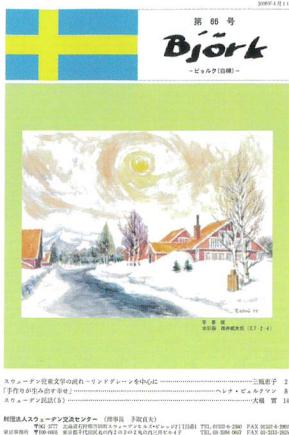
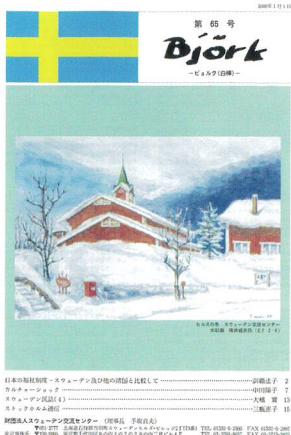
2000年4月1日発行

# 第67号

2000年7月10日発行

# 第68号

2000年10月1日発行



# 第69号

2001年1月1日発行

# 第70号

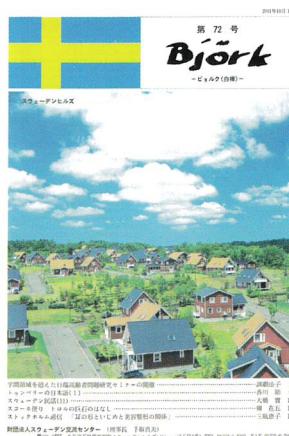
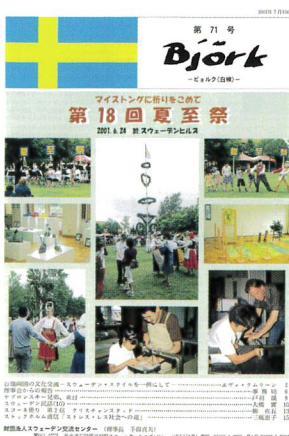
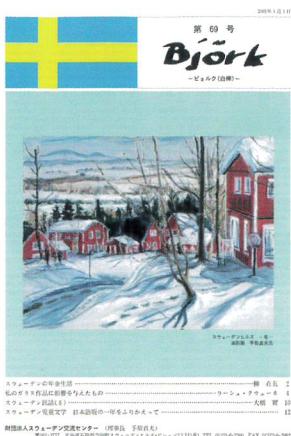
2001年4月1日発行

# 第71号

2001年7月10日発行

# 第72号

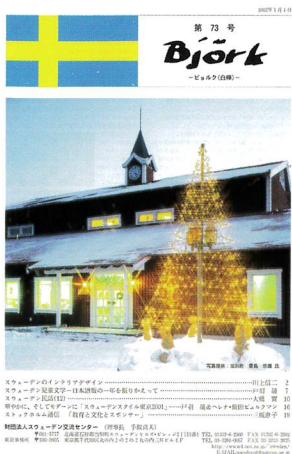
2001年10月1日発行



2000年代に入り、徐々にインターネットが身近なものとなってくると、スウェーデンの情報が手に入りやすくなり、また日本の文化も、よりスウェーデンに伝わるようになっていきました。

## 第73号

2002年1月1日発行



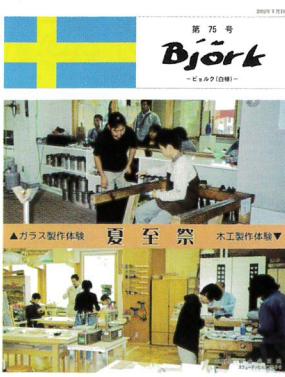
## 第74号

2002年4月1日発行



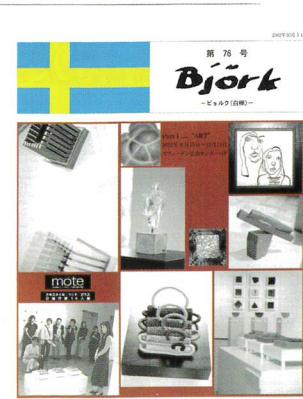
## 第75号

2002年7月10日発行



## 第76号

2002年10月1日発行



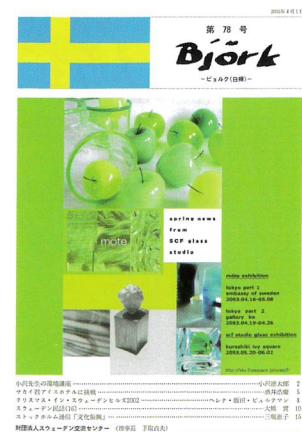
## 第77号

2003年1月1日発行



## 第78号

2003年4月1日発行



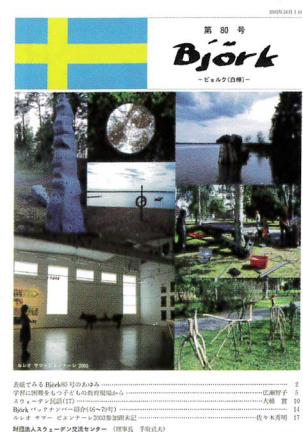
## 第79号

2003年7月10日発行



## 第80号

2003年10月1日発行



今回紹介した53号～80号にかけての年代では、98年の冬季オリンピックや、2002年のサッカーワールドカップが日本で開催された際には、スウェーデン代表チームが来日し、その記念イベントが数多く開催されていました。

発見力  
つながりをみつける力

[業務内容]  
美術、書道作品集・記念誌・町史・チラシ・ハガキ、  
パンフレット・自費出版・インターネット事業、  
各種イベント他

 NAKANISHI PRINTING CO., LTD.  
Since 1953

〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号  
TEL (011)781-7501 FAX (011)781-7516  
<http://www.nakanishi-printing.co.jp/>

新型コロナウイルスは、世界各地で新たな変異株の発生とその拡大という事態が発生し、ワクチンの接種が進みつつある日本でも、引き続き感染拡大防止に対する取り組みが求められています。

今回は、以前 150 号でご寄稿いただいた URL (ユニバーサルリサーチラボ) 代表の浦野様に、精力的に取り組みをされているオンラインの活動の取り組みと、URL の一員としてスウェーデンのマルメにお住まいの中村様から、マルメでの生活についてご寄稿いただきました。

## 寄稿

# マルメからの便り

URL (ユニバーサルリサーチラボ) 代表

浦野 真理

北欧日本人学生会代表 /URL YOUTH パートナー

中村 満里奈



## はじめに

浦野真理です。URL (Universal Research Laboratory) というコミュニティ活動をしています。コロナ禍で活動の場はオンラインへシフトしましたが、最大の実りは新しい仲間に出会えたことで、中村満里奈さんもその一人です。URL に仲間入りして以来、私立学校のオンライン講座で自らの留学経験を中高生に伝えたり、『“逃げ恥”から考える幸せな社会の捉え方』と銘打ったオンラインイベントを企画し開催するなど、豊かな感性と、確かな問題意識をもって積極的に活動しています。スウェーデン留学経験をもつ満里奈さんは、この 7 月にスウェーデンのマルメへ渡り、現地特派員さながら、現地情報を写真付きで送ってくれています。

### 【マルメとわたし】

はじめまして。中村満里奈です。北欧日本人学生会という団体を設立し、北欧と日本を繋げる場づくりをしています。私が初めてスウェーデンを訪れたのは、2019 年の 8 月。マルメに近いアルナーブという小さな町で、森と動物に囲まれながら半年間の留学生活を送りました。スウェーデンでの生活は、私のライフスタイルや考え方を 180 度変えるものになりました。マルメ中央駅に初めて着いた時は今でも覚えていて、美しい駅とその目の前に流れる運河、平日の昼間にベビーカーを押して歩くお父さん達…という光景に圧倒され、全くの異世界に来たのだと感じた瞬間でした。その後スウェーデンの大ファンになった私は、マルメ近郊に何度か住む機会を見つけ、その滞在の間に寄稿に参加させていただいている。

## マルメの生ゴミ収集システム

最初に興味をひかれたのが、こちらの写真です。



生ゴミの回収ポスト Sopnedkast

家庭で出た生ゴミを専用の紙袋に入れてこのポストに捨てる。生ゴミは吸引され地下へ運ばれます。各所のポストから集めた生ゴミは処理され市営バスの燃料や畑の肥料に活用しているとのこと。マルメ市の公式サイトには、このシステムのおかげで住宅街にゴミ収集車が入ってくることがなくなると書かれています。街並みの観点からも優れたシステムだと思います。

## ファッションのポスター

私がルッキズムという言葉を知ったのはごく最近のことですが、5 歳上の姉をもつ私は、少年の頃から「それ」に心を引っ張られる姉やその友達の姿を近くでみてきました。そのためか、外見や容姿についての画一的な基準や価値観にある種の嫌悪感を持ってきたように思います。まっすぐな髪、痩せ型の体型、白い肌のファッションモ

デルたち。典型的な美しさとされるものが、無用な苦しみを生んでいるのではないか。マネキンやファッションモデルの体型や容姿が、もっと多様になったらいいのに…そのような願望を持っていた私を、良い意味で驚かせるのは、このポスターです。



マルメのファッショングループ内にあるポスター

「満里奈さん、これ実際にお店にあるんでしょ？」  
「いいですね！うん、いいですよ。これ、とってもいい！」

やや興奮してそう言ったのを覚えています。解放感がありますね。たとえ容姿に悩みのない人でも、きっと自由で寛容な気持ちになれるはずです。

#### 【女性であること】

満里奈さんがよく言うのは「こっち（スウェーデン）にいると自分が女性であることを忘れる」という言葉。その感覚は、男性の私には正直よくわからないのです。日本で女性でいることに「何らかの圧力」がかかっているのだろう、と想像する以外にありません。女の子らしく云々、女性ならば云々など、いろいろと枠をはめられているのでしょう。よくわからないと思ってること自体、私も問題あり、ですね。

## 街の中のレインボー

ジェンダーにまつわる現地の雰囲気は気になります。街でみかけた日常風景を撮ってきてもらいました。



街のあちこちで、レインボーカラーが見られます。



電車内で流れる鉄道会社のCM映像の1コマ



マルメ市が配布しているグッズ。  
「You are included」、行政の素敵なお取り組みです。

## エコなお店

「食品スーパーへ行ってそっちの様子を教えて」というお願いもしてみました。特にオーガニックやエコなお店がお目当てです。早速、スウェーデン初のパッケージフリーショップ「GRAM」を訪れ、写真を撮ってきました。



量り売りは大豆や緑豆などの豆類、乾燥コーン、数種類のお米等。チョコレートコーティングやシナモン味のアーモンドのように、お菓子系のナッツもあります



固体石鹼や固体シャンプー、固体ワックスなど

スウェーデンでは、野菜や果物などに関しては「より長持ちするから」という理由でプラスチック包装がむしろ増えているそうです。コロナ感染対策も大きな理由でしょう。生鮮食品が傷んだり腐ったりして捨てるのを防ぐほうを優先する。ある意味で合理的ですね。



スーパーの野菜や果物のコーナー

## 大人と子どものお話

北欧では大人と子どもが対等だ、よく言われますが、最近満里奈さんから興味深いお話を聞きました。例えば声のトーンがそれに当たるそうです。相手が子どもでも、大人同士と同じトーンで話しかける、とのこと。また、よく「尋ねる」のだそうです。何が食べたい？どこへ行きたい？など、子どもが自分の意見を言うためのやりとりが交わされているのですね。

日本で3月に出版された書籍『リフレクション』(※1)は、人事や研修の分野の話題本です。基本的にはビジネス向けで人材や組織づくりがテーマですが、著者の熊平美香さんは教育についても少し触っています。

オランダやドイツ、デンマークに視察に訪れた際に、ヨーロッパには「学習する国」という概念が存在し、クワトロヘリックスと呼ばれていることを知りました。学習する国には、教育と社会が共進する姿がありました。(p.377)

※1 熊平美香著『リフレクション - 自分とチームの成長を加速させる内省の技術』(ディスカバー・トゥエンティワン、2021年)

(オランダでは) 4歳の頃から意見の背景にある経験や知識を共有することが期待されています。(p.201)

オランダのシチズンシップ教育では、4つの原則を子どもたちに定着させるのだそうです。

- 【1】友だちと意見が違っても、友だちでいてよいこと
- 【2】友だちの意見に対して、「賛成」「反対」「わからない」のいずれかの意思を表明する責任があること
- 【3】意見を述べる際には、理由と事例を添えること
- 【4】対話を通して、自分の考えを変えてよいこと

特に【4】は重要だと思います。それぞれが意見を伝え合う意味は、お互いに影響をしあうことにある。そのためには意見が変わることを否定的に思わないこと。それはとても創造的で、建設的な構えではないでしょうか。

## 意見をもつとは

意見をもつとは、いったいどのような過程を経るのか？これは私の関心テーマです。一般には、

- ・よく考える  
→だから、自分の意見を持つことができる  
→意見を持っているから、それを人に話せる
- ・まず人に話してみる  
→そのことを考えるようになる  
→そのために自分の意見ができてくる

という順序で考えられていますが、その逆はどうでしょうか？つまり、

**「まず尋ねられる。それが最初ですよね。」**

日本の大学に在学中、休学してデンマークのフォルケホイスコーレへ留学した彼は、当初「君はどう思う？」「君の意見は？」とよく求めている周囲に戸惑ったようなのです。自分が意見を言うためには、まず相手に「聞かれる」こと。それは子どものうちから、身近な所から習慣になつていれば、決して難しいことではなさそうです。とても面白い観点です。

## 若者が声をあげないのではなく、 声をあげさせていない？

さて、もう少し話を広げてみましょう。日本の若者世代は、社会問題に対する意識が低い、自分の意見を持っていない、自分の頭で考えていない、などと言われています。実際に若い人と仕事をする機会の多い私は、これらを決して偏見でも印象論でもないと感じていますし、無関心と共に諦めがあるのだろう、と想像しています。

「声をあげる」という言葉がありますね。民主的な社会

にとって、たいへん重要な言葉です。声をあげるとは、ただ文句や不満を言いつることでなく、自分の意見を表明すること、主張すること。社会に対する要求、抗議をしっかりとと言葉にし、公に（パブリックに）発信すること、といったところでしょうか。得てして「日本の若者は声をあげない」という実情があるのです。

スウェーデンなどの北欧の若者政策、若者の社会参画の研究者、両角達平さんが最近出版した『若者から始まる民主主義』（副題：スウェーデンの若者政策）（※2）は、スウェーデンの若者たちのリアルな姿や、彼らのもつ価値観や考え方が色とりどりに描かれ、また社会的な制度の観点や、著者の意見も鋭く、示唆に富んだすばらしい1冊です。本の内容はぜひ手にとって読んでいただくとして、両角さんの言葉を一ヶ所引用してみます。

スウェーデンの若者政策は、困難な状況にある支援ニーズの高い人が声をあげられる状態を確保し、その声が社会的な影響力を持つことを目標にしている。「声をあげない」ではなく、「声があげにくい状況にある」と捉え、声をあげることができると環境を作ること、そしてその声を反映させることができ、若者政策の、ひいては社会全体の責務であるという自覚があるのである。（p.194）

若者に声をあげることを求めるだけでなく、声をあげやすい環境をつくる、またその声は反映されるべきである。これらは有機的で動的な、躍動感をもつ社会の、有望なビジョンになります。

## おわりに

人類全体を襲ったコロナ禍はまだまだ出口が見えません。しかし、いずれ何らかの形で次のフェーズに落ち着くことでしょう。決して、以前の人間社会に戻るということにはなりません。次の時代には、さまざまな変化を経ており、新たに更新した社会の姿があるわけで、必ず若者の時代感覚、発想、そして若者の視点での問題意識が不可欠です。大事なのは「若者に託すこと」なのです。両角さんの言葉を借りれば、声をあげやすい環境を整えるのはもちろんのこと、その声を「反映させること」が、最大のポイントになる。このビジョンに強く共感します。日本社会にこれまで殆どなかったこのビジョンは、大いなる挑戦であり、希望もあります。

最後に、私と満里奈さんがそれぞれ考えている「これからのこと」を載せて終わりにします。オンライン一辺倒になっているURLの活動は、いずれリアルの場へシフトします。大学のゼミとも協働したいですし、学校教育の現場や、国内のエコビレッジの訪問先も決まっています。アーティストの工房、次世代型シェアハウス、そしていつの時期にか北欧へ足を運ぶことも活動の展望にはっきり描いていることを、ここに書いておきます。

### 【北欧×日本×社会問題】中村満里奈

スウェーデン留学後に日本に帰国してからは、今まで当たり前だと思っていた日常の出来事にたくさんの衝撃を受けました。中でもジェンダーの問題や政治、環境問題に強く関心を持つようになり、オンラインでの場づくりを通じて様々な人

と対談した中で、北欧に留学した学生に同じ関心を持つ人が多いことに気が付きました。

そしてその学生たちの多くが、私のように北欧での留学経験を機に社会問題に関心を持つようになったと話していたのです。そこで北欧と社会問題をテーマに何かできないかと思い、Clubhouseというアプリを使って「北欧現地人と北欧に関心がある日本人」を集めて社会問題について対話する機会を何度か作りました。多いときには80人以上の人人が参加し、夜中まで続く白熱した議論になりました。日本ではまだ社会問題について対話することは一般的ではありませんが、スウェーデンでは家族や友人と日常的に社会問題について話します。そのことが政治への関心の高さ、投票率の高さ、そして国の幸福度の高さの要因の一つであると感じています。

ヨーロッパの中でも特にスウェーデンは親日国である印象があり、日本が好きな人によく出会います。そこで今後は北欧×日本×社会問題をテーマに、オンラインを駆使しつつスウェーデン現地で交流の場づくりをしたいと夢見ているところです。特に北欧に留学に来ている学生に、現地の人と対話する機会を通じて世界から見た日本に触れてもらい、刺激を受けて日本にその感覚を持ち帰ってもらえるような場づくりをしてみたいと思っています。

### 【URLの活動は、2つの柱を持ち続ける】浦野真理

URLの活動には、今までこれからも、ルールらしきものは一切ありません。ただ、大切にしているコンセプトは2つあります。ひとつが「未来」、もうひとつが「世界全体」です。例えば勉強会やワークショップには、古典を楽しみ味わうとか、歴史を学ぶための場はカルチャーセンター等々に山ほどありますが、私たちURLは「未来」を志向するグループであることを心がけています。学びも、活動も、人間関係も。2つめの「世界全体」は、より一層大切にしなければなりません。いろいろな社会問題や、もっと普遍的な人間の自由、平等、未来の社会のあるべき姿などのマクロなテーマ。並行して「個人」も大切なテーマで、これからを生きる個人の、挑戦と余白、生き方、人ととのつながりなどを、カジュアルに、時にはとことん深く追求します。避けるべきは日本のモノサシだけで思考が前に進んでしまうこと。それではいくら深めても意味がないと確信しています。世界全体を見渡し、その感覚であらゆる事柄に向き合っていくのです。

中村満里奈さんによる「マルメからの便り」はいかがでしたか？今回はごく一部をご紹介しましたが、日本にいる私たちに良い刺激を与え、希望を持たせてくれますね。これからも、お互いが交流し合うことで、創発的な変化を起こしていけたら最高です。またビヨルクでお伝えできればと思っています。

## ご寄稿者紹介



うらの まこと  
**浦野 真理 さん**

1978年生まれ、つくば市在住。夏のストックホルム、コペンハーゲンへの旅行で街に魅了され、北欧に関心をもつように。現在2人の子育て中（4歳と0歳）。研究職として企業に務める傍ら、個人活動でURL（ユニバーサルリサーチラボ）を2016年に始動し、北欧以外にもポスト資本主義や環境問題などを探求している。

なかむら まりな



中村 満里奈 さん

東京在住の大学院生。これまで5カ国に留学経験があり、大学院では都市計画を専攻中。世界日本人学生会、北欧日本人学生会（代表）、URLの3つのコミュニティに属し、オンラインでのイベント企画運営をメインに多様な場づくりをしている。セムラが大好き。インスタグラム:@marina.anzu お気軽にフォローしてください♪

シリーズ  
第16回

# 今のスウェーデン、 新学期の秋だ。 ～Ny termin i Sverige～



Sjötorpsskolan という12歳ぐらいまでの子が通う義務教育の学校の校庭で突然の出会い。Hej! はスウェーデン語で「こんにちは」という意味です。

スウェーデンでは新学期が始まるのは8月の下旬から9月頭ぐらいで、暖かそうに見えるのは街路樹の葉っぱの色だけで日増しに寒い日が多くなってきます。



目が覚めるような夏が終わったあのひんやりした空気。

新しい学び、冒険の匂いが町に溢れます！

**「なにかが始まろう！ きゃあ楽しい！！」**

っていう小学生の笑顔もこの時期ならでは。

← 妹のフリーダ撮影。  
インスタグラムで @friday246 →



そして個人的に秋になったなあって感じるのは、お母さんが靴下を履くときです。日焼けできる時期は9月上旬で終了とわかります（スウェーデンでは日が長くなる夏の時期に日焼けしたいっていう人が多くて、私と妹とお母さんの3人でいつも日焼け勝負をしています。一番日焼けした人が勝ちっていう。私は今年も負けました。）

そこで今回は、スウェーデンの新学期についてご紹介していきますね！



スウェーデンの一年間の学期を簡単にいうと、このような感じです。

秋学期

HÖSTTERMINEN

8/9月～1月まで

春学期

VÄRTERMINEN

1月～5/6月まで

夏休み

SOMMARLOV

5/6月～8/9月まで

そして今回のビヨルクが出される10月になると、間もなく「秋休み」というものがやってきます。もう始まっているスウェーデンの秋学期には2回お休みがあって、10月の下旬から11月の上旬までの間1週間ほどある「秋休み」と12月末から3週間程度ある「クリスマス休み」です。

11月や12月となると、緯度の高いスウェーデンでは日が短くなるので、太陽が見えない日々を送ることで気分が落ち込みやすくなるという北欧特有の事情もあるのです。



あたらしい学期が始まることは、本屋さんに行ってもわかりますね。

左の写真は、匂いのある消しゴム！学期のはじめによく使いました。この懐かしい匂い。日本にもありますか？Suddstift fruktdoft（果物の匂い消しゴム）って言って、右下の「-(:-)」は補助通貨オーレ Öre の表示部分を表していて、-はゼロ、つまり 25 クローナと 0 オーレっていうことになります。日本円で 302 円ぐらいですかね。今ではオーレはほとんど使われていませんけどね。



花のノート手帳かわいい！全部ほしいい！



やった！アンズタケを見つけた妹顔。  
妹のフリーダ撮影。  
インスタグラムで @friday246

## キノコ狩り *Svamplökning*

スウェーデンでは秋になるとキノコ狩りの時期です。

キノコ狩りで大事なのは、キノコ狩りのスポットを教えないということ。仲の良い友達ぐらいですかね。そんなキノコ狩りで気になるディスカッションをスウェーデンの *Familjeliv*（直訳：家族生活）、日本でいうと「知恵袋」というところで発見しました。

詳細なやり取りはここでは伏せておきますが、どんな話題のかっていうと、「良いキノコ狩りの場所を友達と見つけて内緒にしておこうと約束したのだけど、その友達が別の人へ教えてしまってキノコが取られてしまった」というもの。これに対してこの投稿はどう対処すべきだったのか？というのがディスカッションの内容です。結構過激な発言も出ていました。

このやりとりを読んで思ったのが、私のイメージとしてはスウェーデン人は外交的で平和的だと思っていたんですけど、ネットの中では違う側面が出てしまうのかな？このキノコのやり取りについては冗談ではない感じですが、私も正直キノコの文化がここまで深いものとは知らなかったです。スウェーデン文化的一面を勉強させていただきました。

皆さんはどうですか。日本のみなさんはキノコ狩りをしていますか？しているのであれば、絶好のキノコ狩りの場所を他の人に知られてしまったらどうしますか？

そして学生のみなさん、新学期の匂いはみなさんにとってどんな匂いですか？

今回の記事を読んでくださってありがとうございました。楽しんでいただければうれしいです！

それでは、また次回！

記事やブログ、インスタへのご意見  
ご感想お待ちしています！

インスタグラム：[instagram.com/wagasueden](https://instagram.com/wagasueden)  
ツイッター：[twitter.com/wagasueden](https://twitter.com/wagasueden)  
ブログ：<https://wagasueden.hatenablog.jp/>

Author



Sofia Malm

ソフィア・マルム

2010 年高校を卒業後、日本に留学。カリ日本語学校で学び、帰国後日本語能力試験 1 級を取得。

ダーラナ大→ウプサラ大→ストックホルム大を渡り歩き日本語／日本学を修了。途中 2015 年に京都大学に 1 年の留学を経て、2017 年 6 月ストックホルム大学日本学科を卒業。いわゆる大学移民。好きなものはおにぎり、赤飯そしてマグロ丼。

スウェーデンの生活についてインスタグラムとツイッターもやっていますので、スウェーデンに興味があったら、是非見てみてください～



気分は北欧生活。

S スウェーデンヒルズ Since 1984  
Sweden  
Hills

札幌郊外の丘に北欧の街並。  
スウェーデンヒルズ。

大都市近郊でありながら自然に囲まれた美しい街並。  
「人が人らしく、自然と調和して豊かに暮らす」を理想に、  
スウェーデンの住環境を再現した住宅地として誕生以来30年。  
美しい風景の中で約300家族のくらしが息づいています。

0120-242-522 [スウェーデンヒルズ](#)

スウェーデンヒルズ ウエスト地区 レクサンド公園

賛助会員入会のお願い

一般財団法人スウェーデン交流センターは、ガラス作品や木工作品の制作などを通じて多方面での交流を行うとともに、夏至祭、ルシア祭、各種展覧会など、年間を通して様々な催しを行い、スウェーデン文化の紹介を積極的に行なっています。

これらの催しは、当センターの趣旨にご賛同くださる皆様が賛助会員としてその運営基盤をささえてくださっており、毎回の催し等は、広報誌「ビヨルク」にも掲載し、賛助会員の皆様には、年4回ご自宅まで郵送、いち早く情報提供しています。ぜひ賛助会員にご入会下さいよう、お願ひいたします。

賛助個人会員 年会費 一口 5,000円

賛助法人会員 年会費 一口 20,000円

あとがき

- 春先から始まった新型コロナウイルスのワクチン接種は、日本各地で進められていますね。まだまだ気が抜けない日々が続いますが、コロナを心配することのない日常が早く来てほしいものですね。
- 今回の表紙を飾ったクングスレーデン。とても長いコースなので、約1ヶ月かけてパート全部を歩く人もいれば、好きなパートを1つ選んで歩く人もいます。綺麗な虹を写真に収めて提供してくれたヨハンナさんですが、クングスレーデンの最初の区間、ヘムワーランからアンマルネース間を雨と風に見舞われながら6日間かけて踏破したそうです。頑張った結果の虹ですね！（うっすらともう一本虹がかかっているのですが…見えますか？）